

宮崎市文化財調査報告書第36集

熊野第2遺跡

1999

宮崎市教育委員会

はじめに

宮崎市は平成10年4月から中核市となり、地方拠点都市として更なる発展が期待されており、複雑多様化する生活環境に対応すべく努力しているところでございます。そのような状況の中で、ともすれば新しいこと、目先のことにも心を奪われ、自らのことを中心に考える風潮が現れていることは嘆かわしいことであります。古来日本人は、神や仏を畏敬し、自然を畏怖しながら、共に助け合って生きてきました。そのことは街角に見られる様々な石仏や石塔、神社仏閣に残されています。そして今、この時期だからこそ歴史を振り返る意味があるのでないでしょうか。

宮崎市では市制70周年記念事業としまして、国指定史跡生目古墳群の史跡公園化を行っており、前方後円墳を始めとする古墳や住居跡等の遺跡と共に丘陵全体を現状で残し、自然と人とのこれまでの係わりを顯そうとしております。

本書は、宅地開発に伴う埋蔵文化財の調査報告書ですが、弥生時代の住居と周溝状遺構が発見され多くの土器と共に、宮崎市の弥生時代から古墳時代への変化を考察する貴重な資料となりました。

最後になりましたが、発掘調査に協力頂きました有限会社 [REDACTED] 、作業員の方々に感謝申し上げます。

1999年

宮崎市教育委員会

教育長 内藤泰夫

例　　言

1. 本書は、宮崎市教育委員会が平成10年1月7日から平成10年1月31日まで実施した熊野第2遺跡の発掘調査報告書である。
発掘調査は平成9年度に行い、遺物整理等は平成10年度に行った。

2. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会 文化振興課

(平成9年度)

総括	課長	野間重孝
庶務担当	技師	鳥枝誠
現場担当	タ	中山豪
	技師補	稻岡洋道

(平成10年度)

総括	課長	野間重孝
庶務担当	係長	永井淳生
	主事	竹野隆司
整理担当	嘱託	椎由美子
	タ	松永光雄
	タ	小川正子
	タ	久富なみ
主査	中山	豪(国民年金課)

3. 本書の執筆は、中山が行った。
4. 本書に使用した図面は中山、椎、松永、小川が製作し、写真的撮影は中山、稻岡が行った。
5. 本書の編集は、中山、久富が行った。
6. 本書における出土遺物は、宮崎市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 歴史的環境.....	1
1. 遺跡の立地と環境.....	1
2. 調査に至る経緯.....	1
第2章 調査の内容.....	4
1. 調査の概要.....	4
2. 弥生時代の遺構と遺物.....	4
1. 遺構.....	4
2. 遺物.....	8
A. 土器.....	8
B. 石器.....	18
3. その他の遺構と遺物.....	19
第3章 結語.....	21

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺図.....	2
第2図 遺構配置図.....	3
第3図 1号竪穴住居実測図.....	5
第4図 2・3号竪穴住居実測図.....	5
第5図 周溝状遺構実測図.....	7
第6図 1号竪穴住居出土土器実測図.....	9
第7図 2号竪穴住居出土土器実測図(1).....	9
第8図 2号竪穴住居出土土器実測図(2).....	10
第9図 2号竪穴住居出土土器実測図(3).....	11
第10図 2号竪穴住居出土土器実測図(4).....	12
第11図 2号竪穴住居出土土器実測図(5).....	13
第12図 3号竪穴住居出土土器実測図(1).....	15
第13図 3号竪穴住居出土土器実測図(2).....	16
第14図 周溝状遺構出土土器実測図.....	16
第15図 竪穴住居出土石器実測図.....	17
第16図 集石遺構実測図.....	18
第17図 その他の出土遺物実測図.....	20

表 目 次

土器観察表	23
石器観察表	26

図 版 目 次

図版 1 (調査状況 1)	27
図版 2 (調査状況 2)	28
図版 3 (調査状況 3)	29
図版 4 (調査状況 4)	30
図版 5 出土遺物 1	31
図版 6 出土遺物 2	32
図版 7 出土遺物 3	33
図版 8 出土遺物 4	34

第1章 歴史的環境

1. 遺跡の立地と環境（第1図）

熊野第2遺跡は宮崎市南部の木花地区のうち大字熊野に所在する。木花地区は鰐塚山に源を有する清武川を北の境界とし、国指定天然記念物双石山を含む日南山地を南の境界限としている。日南山地・家一郷に源を有する加江田川と鰐塚山に源を有する清武川に挟まれ、日向灘沿岸まで延びる清武・木花丘陵域と加江田川流域は、標高2mから3mの水田地帯、清武川と木花丘陵間の標高10mを境に西側が畑作地帯、東側は水田地帯となっている。

木花、清武丘陵上には、宮崎学園都市の建設に伴い、宮崎県文化課により発掘調査が行われ、宮崎学園都市遺跡群として報告された数多くの遺跡が存在する。代表的な遺跡としては、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代草創期の隆起線文土器・爪形文土器、早期の前平式土器・塞ノ神式土器等を出土した堂地西遺跡、縄文時代後期から晩期の土器を出土し、晩期の集落、平安時代の竪を持つ竪穴住居及び掘立柱建物群を検出した平畠遺跡、細石器、縄文時代早期の貝殻文土器・押型文土器・塞ノ神式土器等、弥生時代後期の竪穴住居、中世の周溝墓・掘立柱建物等が検出された前原西遺跡、縄文時代早期、弥生時代中期の竪穴住居・後期の竪穴住居・古代から中世の掘立柱建物、中世の石塔、近世墓等が検出された堂地東遺跡、弥生時代の竪穴住居・周溝状遺構、古墳時代の竪穴住居・土坑、中世の掘立柱建物等が検出された熊野原遺跡、中世山城として今江城・車坂城等がある。

熊野第2遺跡のある丘陵北側の枝状になった部分には縄文時代早期の土器・後期の竪穴住居と土器、弥生時代から古墳時代の竪穴住居、平安時代の焼成土坑・環濠遺構が検出された西ノ原遺跡、弥生時代の竪穴住居、古墳時代から奈良時代の竪や埋甕を持つ竪穴住居を検出した熊野第1遺跡等が存在している。

また、丘陵北側で清武川との間の畑の中には前方後円墳2基を含む県指定史跡木花村古墳が所在している。当熊野地区が「延喜式」に見られる「救麻駅」の比定地とされていることと共に、この地区的歴史を考えるうえで重要である。

2. 調査に至る経緯

熊野第2遺跡は宅地造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査である。

平成9年9月26日有限会社_____の依頼を受けた行政書士_____より、埋蔵文化財有無の照会が文化振興課あて提出された。熊野地区は周知の遺跡や調査済みの遺跡の多い地区のため、現況は宅地と畑地であったが試掘調査を行う旨回答した。

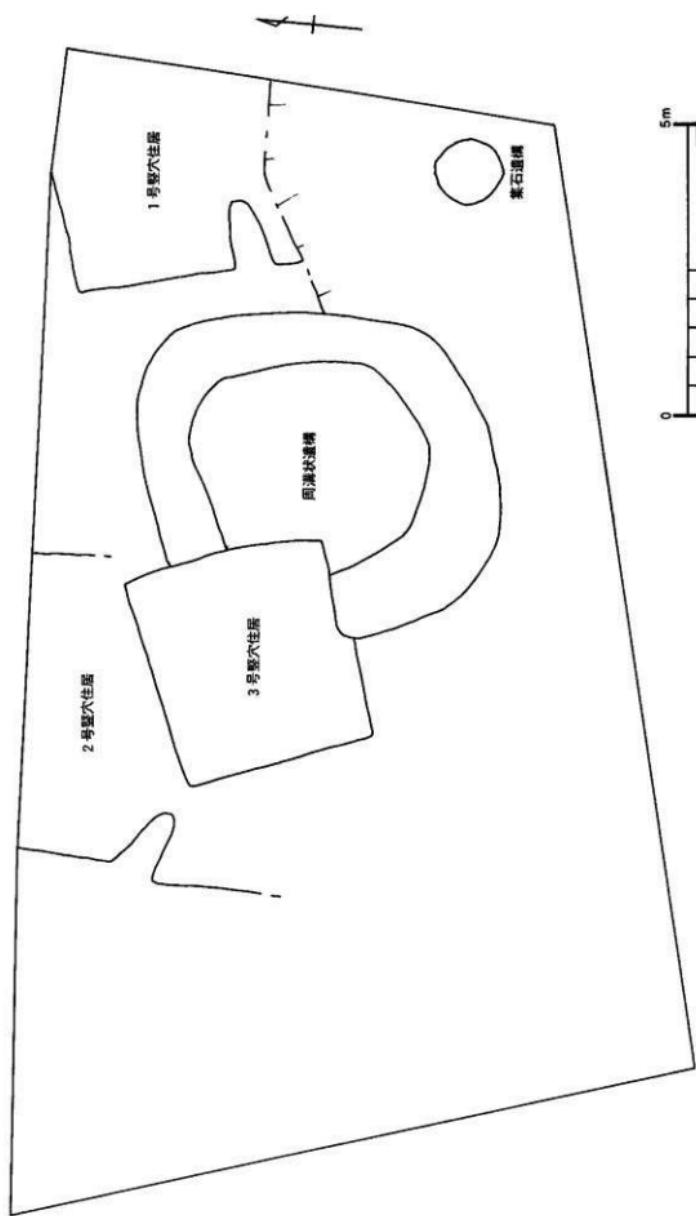
平成9年12月4日パックホーによる試掘調査を行ったところ、上段の部分は既に基盤層と言えるシラス層まで掘削されていたが、下段の部分は淡黒色の奈良時代から平安時代の須恵器や土師器の包含層が検出されたため、下段部分の発掘調査を行うこととした。

発掘調査は平成10年1月7日から1月31までの期間で行い、遺物整理と報告書作成は平成11年3月31日までに行うこととした。



第1図 遺跡周辺図

第2圖 遺構配置圖



第2章 調査の内容

1. 調査の概要（第2図）

熊野第2遺跡は標高5mから6mの南向きの斜面に位置するが、以前農家と納屋、倉庫が建っていた部分でありその前は畠として利用されていた部分に当たり、その上段は丘陵を削平して畠や宅地を造成しており、幅4mの道路を挟んだ南側は水田として利用されていたため、遺構の残りは悪いと考えられた。

層位としては、表面から約1mが前の家を取り壊した際の掘削土となっており、その下層は灰黒色土層、淡黒色土層、アカホヤ層、黄色ローム層となっている。概ね東西方向には水平に堆積が見られるが、南北方向にはかなりの傾斜があるため淡黒色土層、アカホヤ層の両層は中央部分で消えてしまい、中央部より南側は灰黒色土層が厚く堆積しその直下は黄色ローム層が見られるだけである。

灰黒色土層からは、須恵器、土師器、弥生式土器が出土したが、遺構としては畠の畝状のものしか検出されなかった。淡黒色土層からは、弥生式土器が出土したが、遺構の検出は出来なかった。

アカホヤ層に掘り込む形で、弥生時代後期の竪穴住居3基・周溝状遺構1基、時期不明集石遺構1基が検出された。

竪穴住居の内1基は他の1基と切り合っているうえ、周溝状遺構とも切り合っている。

2. 弥生時代の遺構と遺物

1. 遺構（第3～5図）

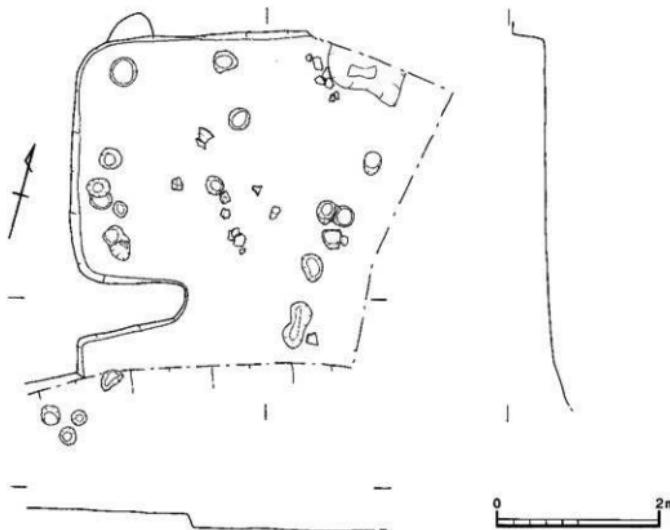
弥生時代の遺構としては、竪穴住居3基・周溝状遺構1基が検出された。

竪穴住居は遺跡の東側に有るものと1号住居、遺跡中央からやや西寄りに有り切り合っているものの内、北側に有るものと2号住居、南側を3号住居としている。2号住居と3号住居の切り合いについては、3号住居の壁から内部に掛かった形で多くの土器片が3号住居の床面より浮いて出土していることから、2号住居が3号住居を切っていると考えられる。

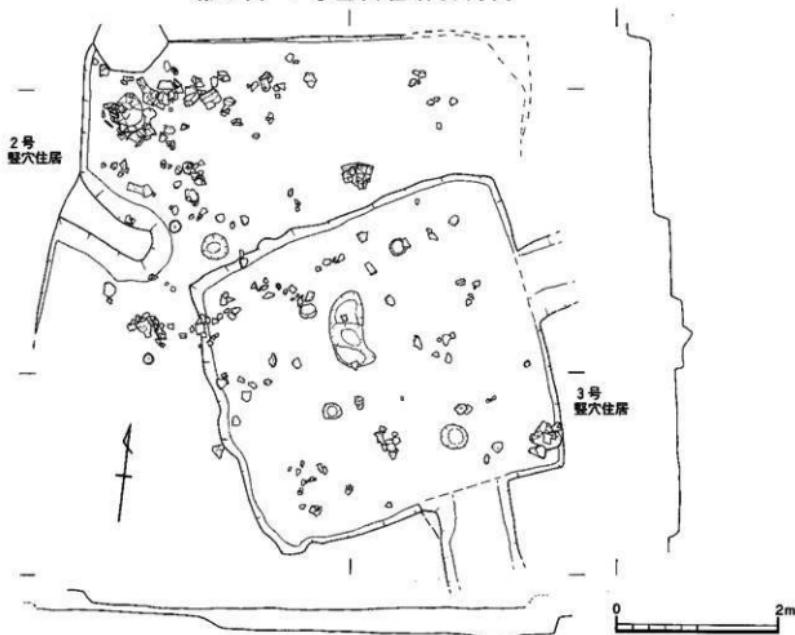
周溝状遺構は、2・3号住居と切り合っているが、遺構検出の際に埋土の状況から3号住居が周溝状遺構を切っていることが確認された。

1号竪穴住居（第3図）

1号住居は、東側半分が調査区外の道路敷きに有り、南側半分を搅乱に因って失っているため全体の約4分の1しか調査できなかった。北壁及び西壁が直線的であり、西側壁に間仕切状の突起が確認されたことから、中央部に間仕切を持つ方形で2区分の形か、南半分を複数に仕切る形になると思われる。又、西壁にある間仕切の中心から北壁までの長さが約3.2m、西壁から東側の床面の長さが4.7m以上あることから本住居は、1辺の長さが約6.4mの間仕切住居になるものと考えられる。主軸は南北方向からやや西に振っている。



第3図 1号竪穴住居実測図



第4図 2・3号竪穴住居実測図

PITは数多く検出されたが、柱穴と明確に判断できる物はなかった。

出土遺物としては弥生式土器、石器があり、器台、高坏、壺、甕等が床面から5~10cm浮いた状態で検出され、台石が床面に付いた形で検出された。

2号竪穴住居（第4図）

2号住居は、東側の壁面と南側半分を削平されたうえ、3号住居と切り合っているため、その形態は不明瞭である。しかし西壁に間仕切状の突起が検出されたこと、その突起が北壁に対して南下がりであること、突起南側の西壁がやや丸みを持つこと、北壁が直線的であることから北半分は方形で南半分は円形に近い形で複数の間仕切を持つ形になると思われる。予想される大きさとしては、東西長約5.5m、南北長約6m程度であり、主軸はほぼ南北方向である。

PITは間仕切状の突起の東側に1基検出されただけであるが、3号住居内のものが2号住居の柱穴になる可能性がある。

出土遺物としては弥生式土器が、住居の北西隅の部分及び間仕切状の突起の南東側から器台、高坏、壺、甕等が集中して床面から5~10cm浮いた状態で検出され、3号住居北壁の際で甕が床に張り付いた形で検出された。又、石器としては、紡錘車が床面から20cm程浮いた形で検出された。

3号竪穴住居（第4図）

3号住居は、東西長4m、南北長3.8mの方形住居で、主軸は南北方向よりやや西に振っている。北壁と西壁は2号住居との切り合いのためか残り具合は余り良くないが、東壁と南壁は周溝状遺構に切り込む形で掘り込んでおり、残り具合は良い。

中央やや北寄りに2段の掘り込みが見られるが、焼土等が見られず性格不明である。

PITは4基検出されたが、位置関係が台形となるうえ、2号住居の柱穴になる可能性もあり、3号の柱穴とは云い難いものがある。

遺物としては、南東角で甕と器台が床面で出土し、南側中央部でも甕と高坏が床面で出土している。北側の遺物は、床面から10~15cm浮いており2号住居に伴う可能性が高い。

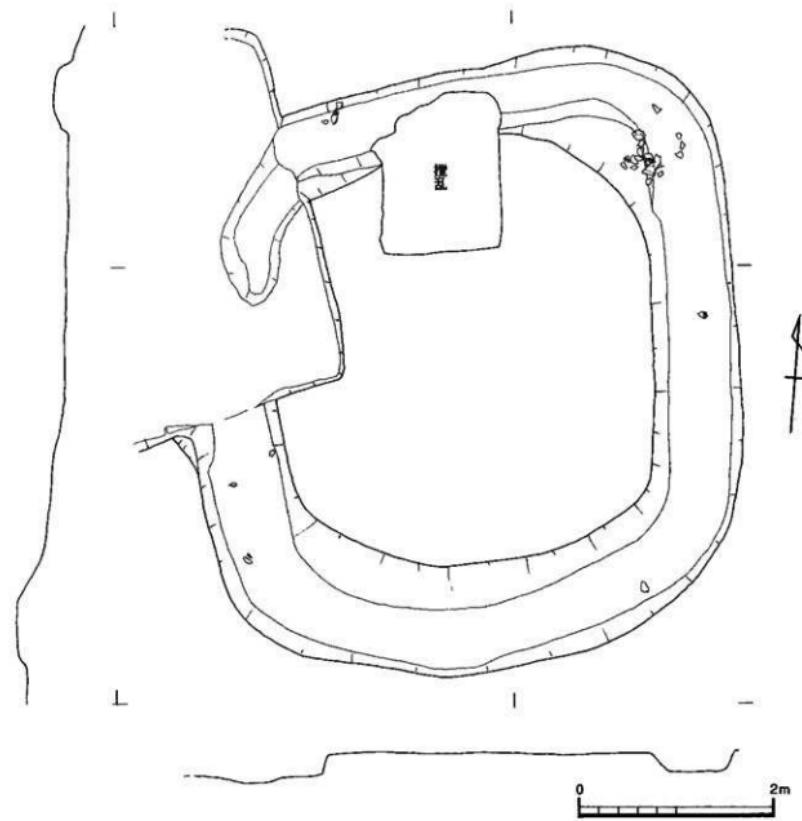
周溝状遺構（第5図）

南北長約6.2m、東西長約5.7mの隅丸方形に近い形を呈し、周溝の上幅0.8~1.3m、下幅0.4~0.7m、内区は南北長約4.4m、東西長約3.9mの隅丸方形となっている。

3号住居に北西角を切られているが、3号住居の床面に北側から回って来る周溝の床面が検出された。しかし、北側周溝の床面は南側から回って来る周溝床面とは続いていないこと、南側周溝の床面が狭まり始めていることから、3号住居に切られた部分に幅60cm程度の陸橋部が有った可能性が高いと考えられる。

内区は、北側を幅1.2m長さ1.6mの範囲で擾乱を受けている他には土坑やPITの類は見られなかったため周溝状遺構の性格については不明である。

出土遺物としては、周溝北東隅の部分から弥生式土器の壺、甕が床面より10cm程浮いた状態で検出された。



第5図 周溝状造構実測図

2. 遺物

A. 土器 (第6~10図)

1号竪穴住居出土土器 (第6図)

1は長頸壺の胴部と考えられ、底部は丸底を呈しており、内外面共に荒いハケともケズリともとれる、工具による調整が施されている。2は小型の脚付壺で、内面はハケで外面はナデである。

3は小型の壺で、内面はナデで外面はハケである。

4は高坏の坏部で内外面共に研磨と思われる。脚部への締まりが強く口縁部の外反度が強いことから二重口縁壺の可能性もある。5は高坏の脚部で外面は研磨で内面は丁寧なナデである。

6は器台の上半部で、外面はハケの後研磨、内面は上部は研磨で脚中部にハケが残る。

2号竪穴住居出土土器 (第7~11図)

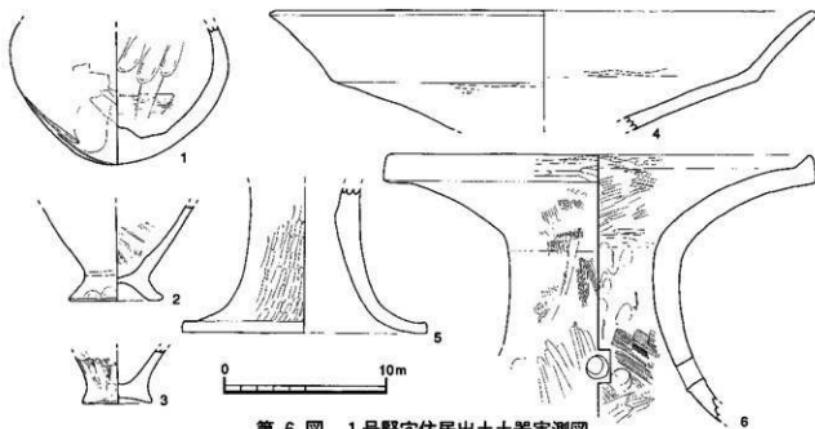
7は、胴部中央よりやや上に最大径を持つ倒卵形の胴部を持ち、口縁部を外反させる壺で底部は平底である。頸部から胴中位にかけて不整円、平行2本線、蛇行線が施されている。外面はハケから研磨、内面は口縁部がハケの後ナデで以下はナデである。8は胴中位に最大径を持つ球形胴に外反する口縁部を持つ壺で、内外面共ハケの後ナデである。9は胴中位に最大径を持つ球形胴に外反する口縁部を持つ壺で口縁端を肥厚させる壺である。内外面共にナデである。

10は口縁部が外反する長頸壺で、肩部に14条の細い沈線を巡らせ、楕円形の胴部に幅2cm弱の上底を持っている。内面はナデ、外面は研磨が施される。11は口縁部が外反する長頸壺で、胴部は中央に稜線を持つ算盤玉形を呈し、小さな平底を持つ。内面はナデ、外面は研磨が施される。12は残存長18cmを計る長頸壺の頸部で、内外面ともにナデである。13は頸部の長さが16cm、胴部は高さ14cm、最大径約14.5cmの菱形を呈し、底部は平底である。内面は荒いハケとナデ、外面はハケの後ナデられている。14は頸部の長さが20cm、胴部は高さ推定15cm最大径約17.5cmの菱形を呈し、底部は欠損している。内面はナデ、外面は丁寧なナデで胴部の稜周辺にハケの後が微かに残る。15は胴中位に最大径を持ち底部は丸底状の平底を呈する短頸壺で、外面はハケ、内面の胴下半はハケ上半はナデである。16は胴中位からやや上に最大径を持つ平底の短頸壺で、外面はハケ、内面は荒いハケの後ナデである。17は上底を呈し胴中位に最大径を持つ壺の胴部で、外面はハケ、内面はナデである。18はやや外反する口縁部を持つ壺の胴上半部で外面胴部は荒いハケの後ナデ、口縁から内面はナデである。19は広口壺の口縁部で、口縁端直下に長めの突帶を1条巡らす。内外面共に研磨が施される。

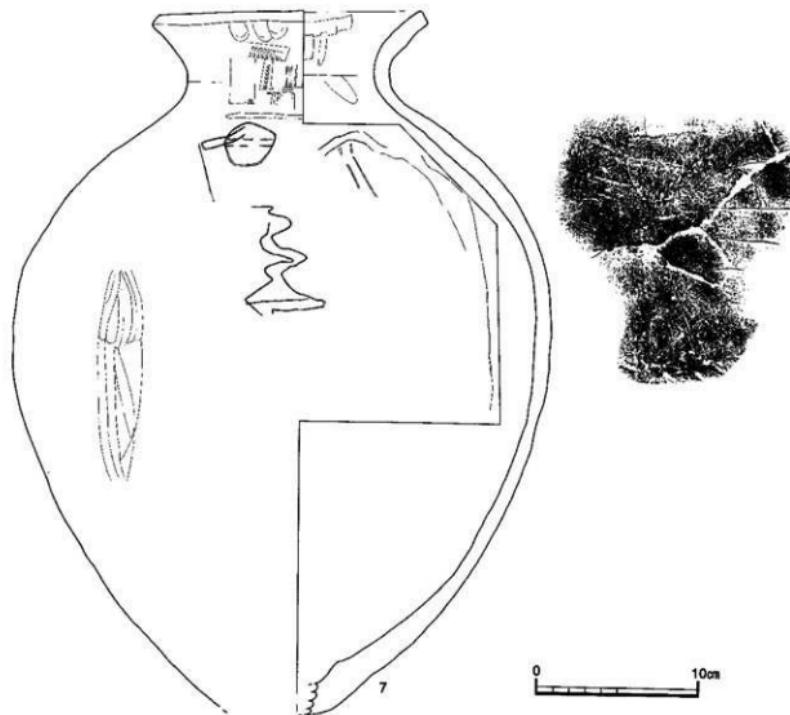
20は大きく外反する口縁を持つ鉢の胴上部で、口縁は2ヶ所で幅約6cm、高さ約1cmの大きさで削られている。口縁部はナデ、その他は研磨である。

21は高坏の坏部で滑らかな椀状を呈し、内外面共に研磨である。22も高坏の坏部で、体部中央に段を持ち段上部は強く外反し口縁端はやや肥厚する。内外面共にハケの後研磨である。

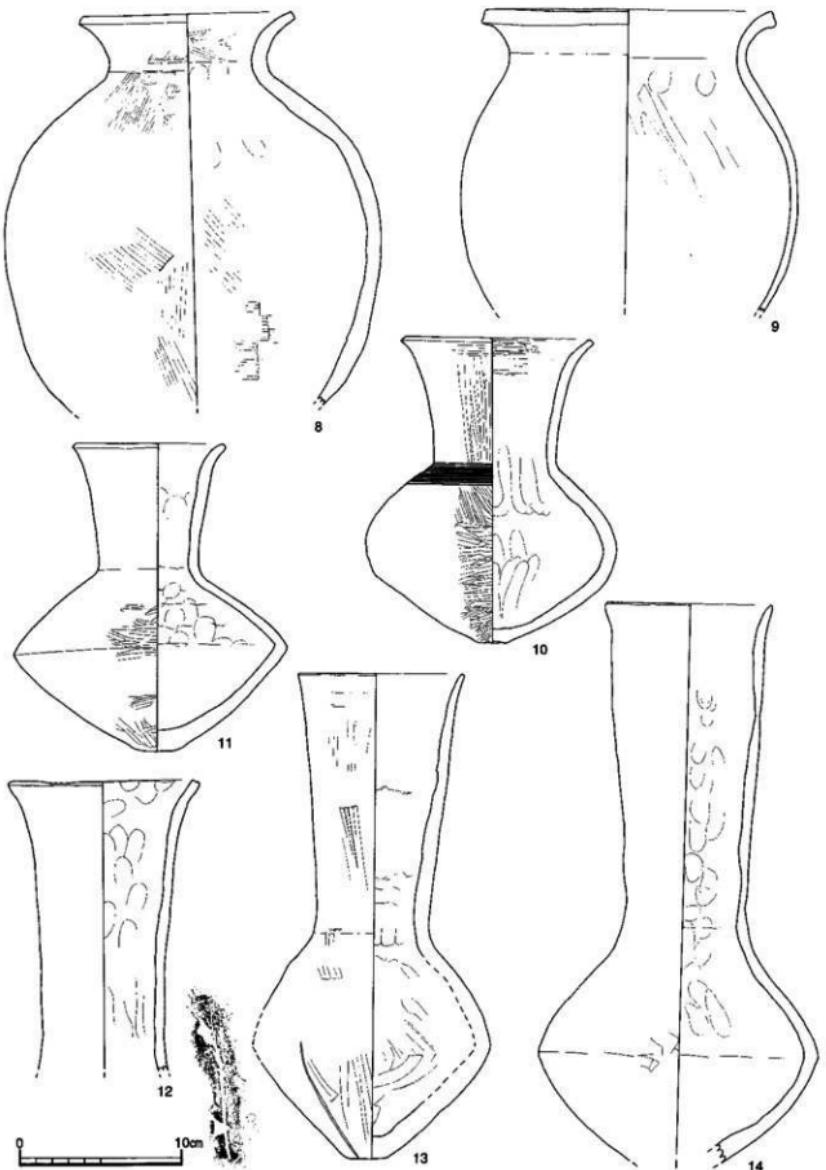
23はラッパ状に開く高坏の脚部で、据端部は中窪みにナデ上げてある。外面は研磨、内面はナデである。24もラッパ状に開く高坏の脚部で、据端部はやや捲れあがっている。脚内面はナデ、



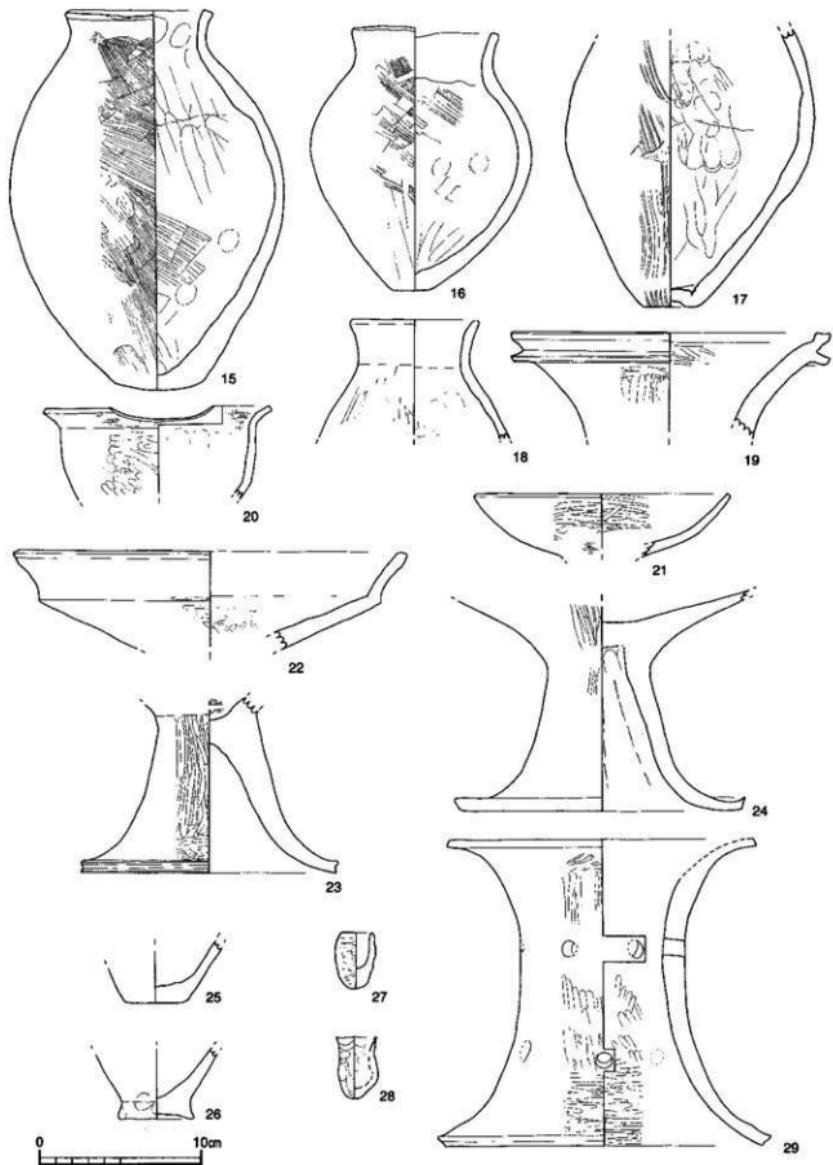
第6図 1号竪穴住居出土土器実測図



第7図 2号竪穴住居出土土器実測図(1)

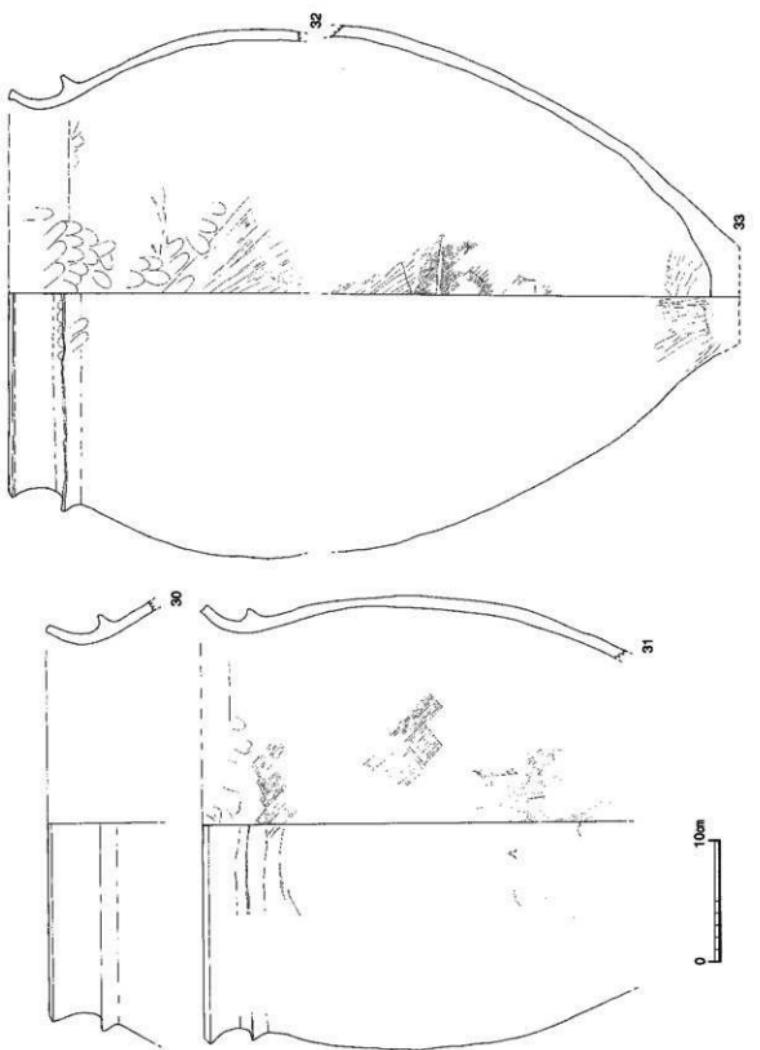


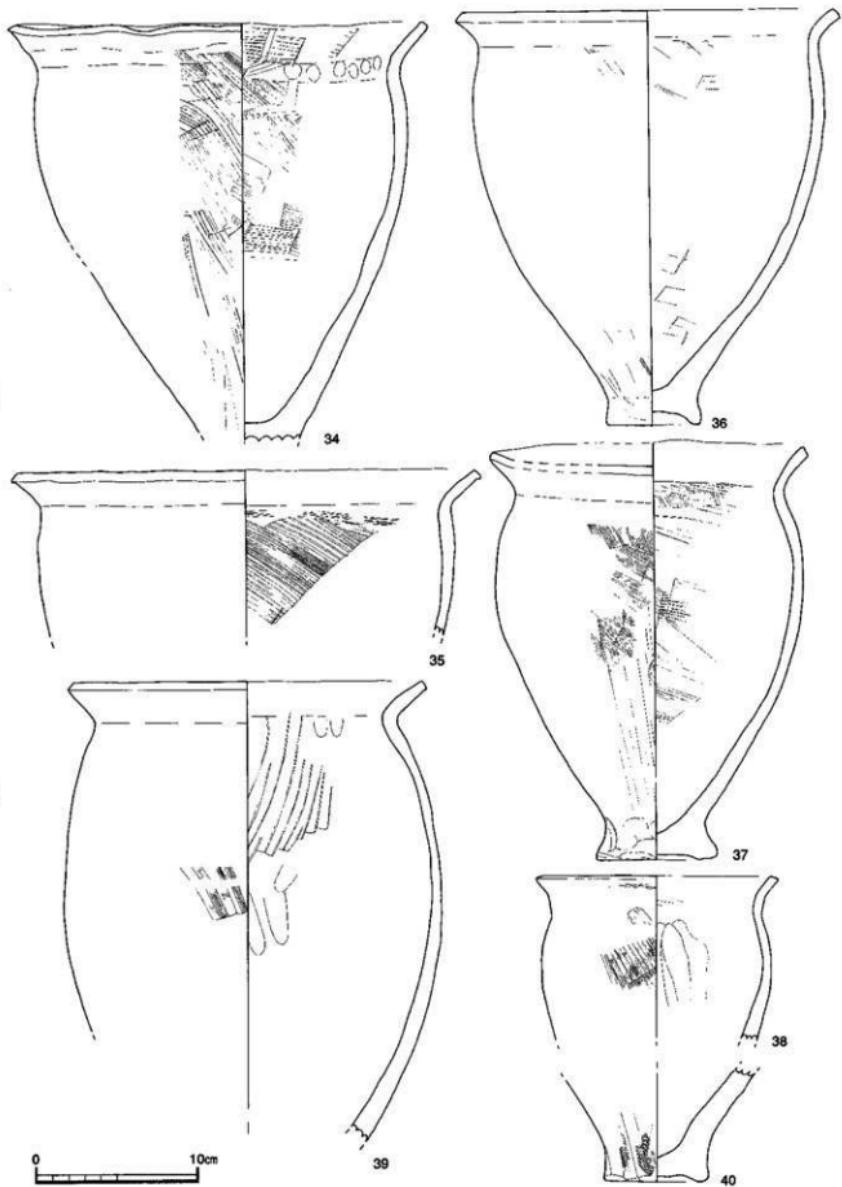
第8図 2号竪穴住居出土土器実測図(2)



第9図 2号竪穴住居出土土器実測図(3)

第10図 2号型穴住出土土器実測図(4)





第11図 2号竪穴住居出土土器実測図(5)

その他は研磨である。

25は小型土器の壺の底部で、内外面共にナデである。26は小型土器の壺の底部で内外面共にナデである。27は壺形の手捏土器で、外面にヘラによる調整痕が残る。28も壺形の手捏土器で、荒い作りである。

29は器台で、胴部には2段に透しが互い違いに施されている。内外面共に研磨である。

30・31は壺で口縁部が緩く外反し、やや上向いた突帯を1条巡らす。31は内面はハケ、外表面はナデである。32・33は同一個体と思われる壺で、口縁部は緩く外反し端部を強くナデつけ、上向きの突帯を1条巡らし、胴肩部に最大径を持つ。内面はハケ、外面は丁寧なナデである。34～39は、強くくの字外反する口縁を持つ壺である。34～38は胴中位より上に最大径を持つが、口縁径の方が広いものである。36・37は、ハの字状に開きやや上底である。39は胴中位に最大径を持ち、口縁径よりも広いものである。40は直線的に延び、若干上げ底を呈している。

3号竪穴住居出土土器（第12～13図）

41は壺の口縁部で、口唇部の一部を切り取り、注ぎ口の様にしている。42は長頸壺の頸部で、内外面ともハケの後ナデである。43は口縁部の外反度が強い長頸壺の頸部で、ハケの後ナデである。44は二重口縁壺の口縁部である。45は二重口縁壺若しくは高坏の口縁部である。46は平底、47はやや丸みを帯びた平底の壺の底部である。

48は高坏の坏部で体中央部に段を持ち、段上部は立ち気味に外反する。内外面共に研磨である。49は直径6cm高さ12cmの円筒状の高坏脚部で珍しい形態である。50は小型の高坏脚部で据端部は水平に曲げてある。51も高坏脚部で脚下部に透しを持っている。

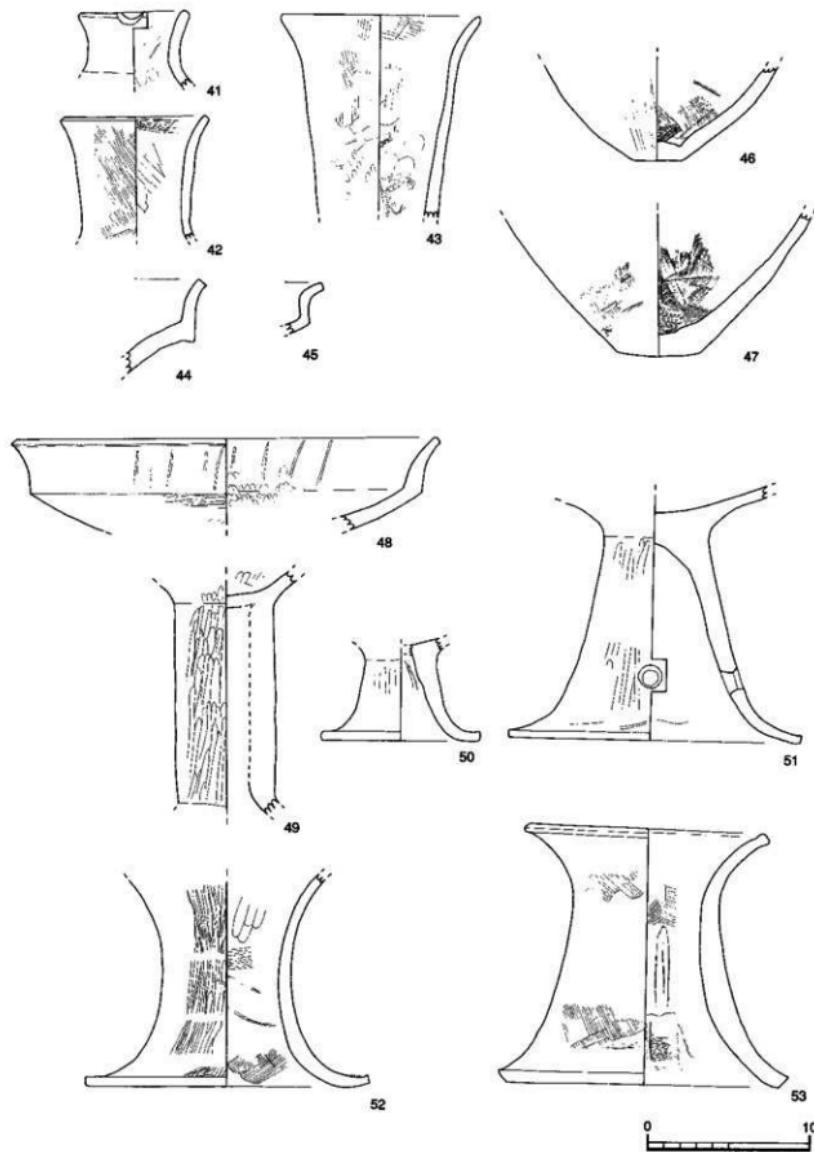
52は器台で上下対称になると思われる。外面は縱方向の研磨を部分的にナデ消している。53も器台で中央より上が最も細くなり、上部径の方が狭いものである。

54はくの字外反する壺で、胴部最大径と口縁径は拮抗し、底部はハの字に開く軽い上底である。55は直線的にやや外反する口縁の壺で、胴部最大径と口縁径は拮抗している。56・57は壺の底部で、ハの字に開く軽い上底である。

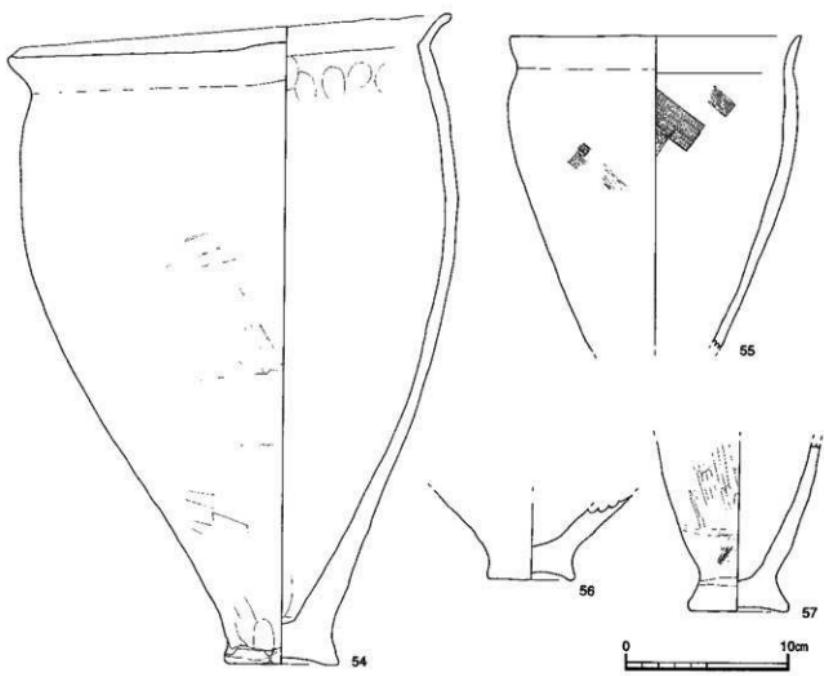
周溝状遺構出土土器（第14図）

58は胴下部に最大径を持つ壺で、口縁端を強くナデ着け平坦面を作るものである。

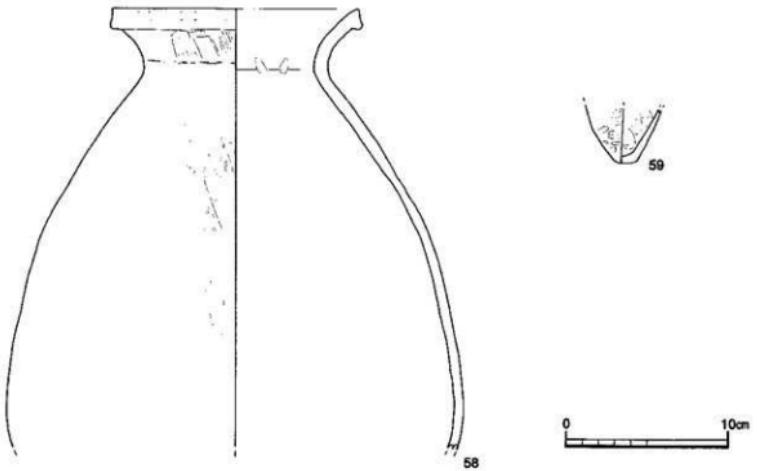
59は小型土器の壺で、外面に箆状の工具痕が見られる。



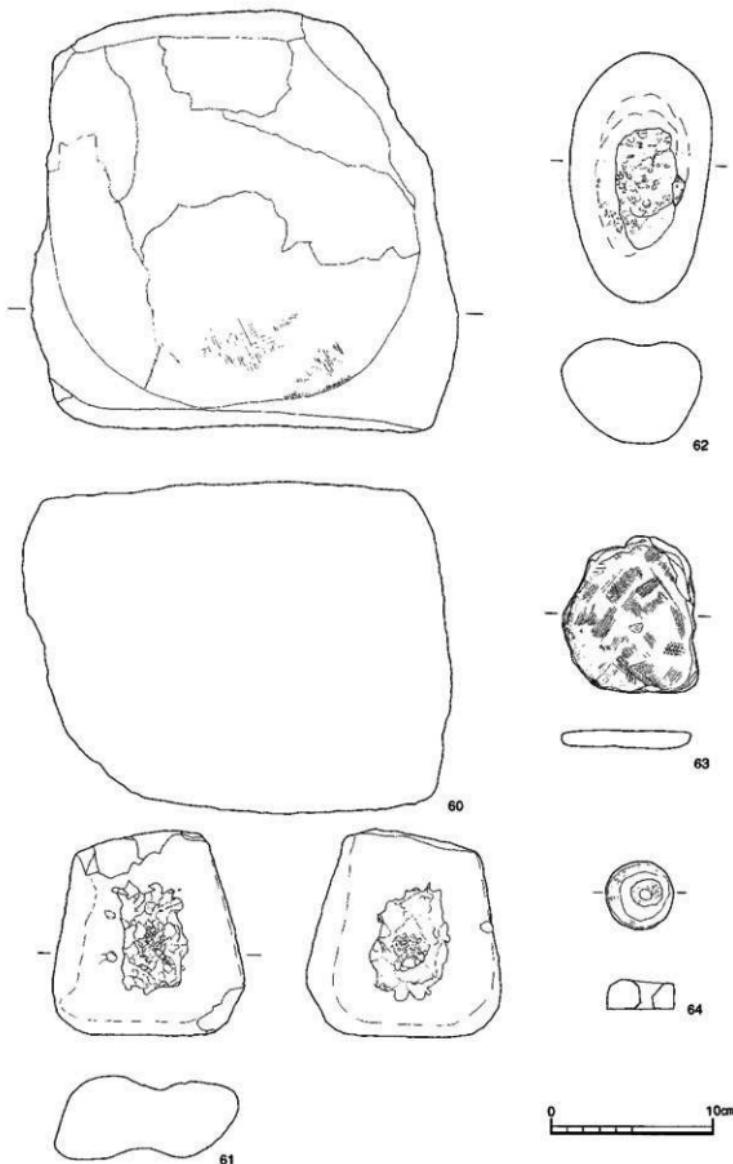
第12図 3号竪穴住居出土土器実測図(1)



第13図 3号竪穴住居出土土器実測図(2)



第14図 周溝状遺構出土土器実測図



第15図 穴居出土石器実測図

B. 石器（第15図）

1号竪穴住居出土石器（第15図）

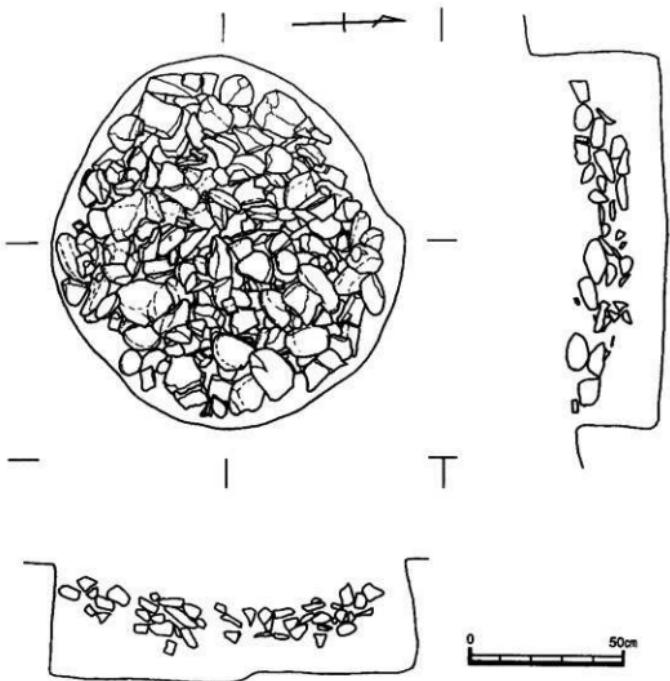
60は台石で、表面は剥離が激しいが、各面の残存部には擦痕が見られる。

61は台形の凹石で両面共に使用度は高い。62は椭円形の凹石で上面の使用が目立つ。

2号竪穴住居出土石器（第15図）

63は厚み1cmの偏平な磨石若しくは砥石である。

64は紡錘車であるが、作りは荒い。



第16図 集石遺構実測図

3. その他の遺構と遺物

集石遺構（第16図）

調査区南東角で黄色ローム層に掘り込む形で検出された。黄色ローム層の上層は灰黒色土を主体とした搅乱層であるが、集石遺構内には黄色ロームの埋土しか検出されなかつたうえ石自体も当初数個しか確認されなかつたことから、遺構自体は本来の形を残していると思われる。

掘り方は、直径約1.2mの不整円を呈し、深さは約40cmを計り壁は底膨らみになっている。集石は厚み20cmのレンズ状の堆積をしており、拳大の石から長さ20cmを超大型の石までが使われ、その大部分が割れている。集石の下には炭化物を含んだ層が床面まで検出された。炭化物の中に先の尖った杭状になった部分が検出されており、集石部分に石と石の間に隙間のある部分が見られることと関係があると思われる。

遺物は検出されなかつた。

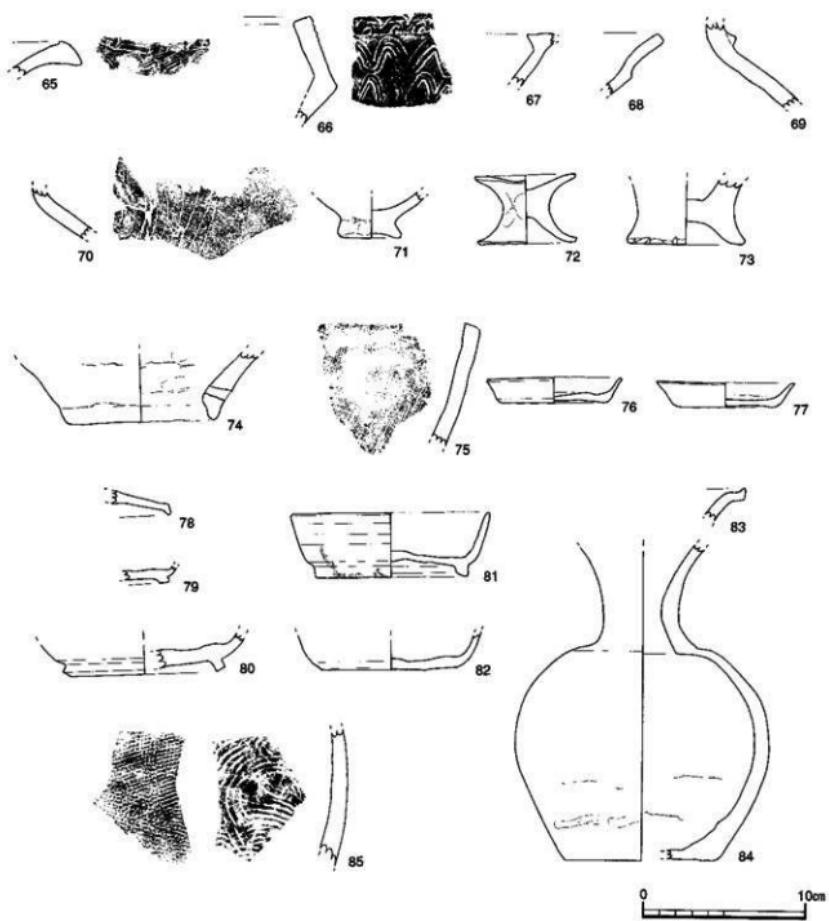
集石遺構は、1号住居の南側に位置するが1号住居の推定復元した南壁に近接しているうえ、1号住居の床面から約60cm下がった面で検出されたことから、弥生時代に属する物とは考え難い。

灰黒色土層出土遺物（第17図）

65～73は弥生式土器である。65は壺の口縁部で、端部に波状文を施す。66は二重口縁壺の口縁部で、口縁部と口唇部に波状文を施す。67は高坏の口縁部であるが端部を欠いている。68は体部に段のある高坏の口縁部である。69は壺の肩部で、三角突帯を1条巡らしている。70は壺の肩部で縱方向の線刻がみられる。71は壺の小型土器の底部でハの字に広がるものである。72は高坏の小型土器と思われるが、器台の可能性もある。73は上げ底の壺の底部である。

74～77は、土師器である。74は、底部周辺に穿孔を持つ瓶である。75は底部を欠く布痕土器である。76は窓切りの坏で、77は糸切りの坏である。

78～85は須恵器である。78は口縁端部を垂直気味に折り曲げた坏蓋である。79は3mm程の低い高台の坏である。80は高台が菱形になり線で接する坏である。81は底部が上げ底状になる高台付き坏である。82は平底の碗である。83は壺の口縁部で強く外反させた後口唇をほぼ垂直に立ち上げる。84は壺で肩に段を持ち、底部に穿孔が見られる。83と84は同一個体と思われる。85は壺の胴部で内面は青海波、外面は平行叩きである。



第17図 その他の出土遺物実測図

第3章 結語

熊野第2遺跡では竪穴住居3基、周溝状遺構1基が検出された。

1号住居は丸底化した壺、高坏の坏部の形態、間仕切住居の形態から弥生時代後期後葉の時期が与えられよう。2号住居は長頸壺の形態に特徴があり、算盤玉形で短胴のもの、算盤玉形で長胴のもの、有文のもの、無文のものが見られる。このことは、市内の中岡遺跡で指摘されており、後期中頃から後葉の時期が与えられている。3号住居は高坏や器台に若干古い様相が見られることと2号住居に切られていることから後期中葉に比定されよう。

周溝状遺構は3号住居に切られていること、壺の形態、手捏土器が出土していることから後期前半に比定される。

弥生時代の土器で注目されるのは、2号住居出土の謂所免田系長頸壺といわれるもの（10～14）と二又状の広口壺（19）である。

長頸壺は、胴高が頸部長より高いもの（10・11）と胴高より頸部長が長いもの（13・14）、胴部が算盤玉形のもの（11）と長胴化したもの（13・14）と椭円のもの（10）とに分かれ、10のみ沈線が施されている。免田式土器の壺では胴部の稜が鋭く底部が平底気味の丸底のものが古く、胴部が丸みを帯び底部が尖り気味の丸底のものが新しく、後出するものは大型化するとされている。このことに照らし合わせると11は古い様相で、13・14は新しい様相ではあるが胴部は大型化していない。更に、10は沈線を持つが重弧文を持たず胴部も球形に近いものであり、その他は無文である。又、10は調整・胎土ともに優れているが他の土器は調整・胎土とともに荒さが見られる。これらのことから、本遺跡出土の長頸壺は免田式土器の影響を受け、その型式変化を受けながら同時期に作られた在地の土器がその殆どを占めていると思われ、恐らくは中岡遺跡で製作され運ばれたものと考えられる。

19の広口壺は、鹿児島県で松木蘆式土器と呼ばれている土器の壺と思われる。

更に、灰黒色土層から安国寺式土器の二重口縁壺の破片が出土している事も重要である。

以上のことから当遺跡は、単に中岡遺跡から土器の供給を受けていただけでなく、弥生時代後期の宮崎平野の交流域の一部には、鹿児島、熊本、大分を含んでいたことを窺わせる遺跡と言えよう。

灰黒色土層からは、土師器では窓切り・糸切りの坏、布痕土器・瓶・須恵器等が出土しており、謂所古墳時代から歴史時代全体を通して当遺跡地が使用されていた事が推察されるが、遺構の検出が出来なかったため、その内容が不明に終わった事が残念であり、今後の課題として残された。

最後になりましたが、宮崎市では10年ぶりに積雪が見られたり、地表が凍結するような寒さの中で発掘調査に従事して頂きました作業員の皆様に、感謝申し上げます。

〈参考文献〉

- | | |
|--------------------------------|----------------|
| 宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書 I [江南・大淀川西部地区] | 1984 宮崎市教育委員会 |
| 西ノ原地区遺跡 | 1984 宮崎市教育委員会 |
| 中岡遺跡 | 1986 宮崎市教育委員会 |
| 西ノ原第2遺跡 | 1992 宮崎市教育委員会 |
| 車坂・山下遺跡群 | 1997 宮崎市教育委員会 |
| 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第2集 | 1985 宮崎県教育委員会 |
| 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第4集 | 1988 宮崎県教育委員会 |
| 日本土器事典 | 1996 雄山閣出版株式会社 |

土器觀察表1

遺物 番号	器種	調 整		色 調		胎 土	備 考
		内 面	外 面	内 面	外 面		
1	壺	荒いハケ、ナデ	荒いハケ	橙褐色	橙褐色、明黄褐色	砂粒、砂礫を含む	
2	壺	ハケ	ナデ	黄橙色	黄橙色	細砂粒～砂礫を含む	
3	小型壺	ナデ	ハケ	暗黄色	暗黄色	石粒を含む	
4	高坏	研磨	研磨	明赤褐色	明赤褐色	砂粒～砂礫を含む	
5	高坏	ナデ	研磨	暗橙色	黄橙色	細砂粒を含む	
6	器台	研磨～ナデ～ハケ～研磨	ハケのち研磨	黄褐色	黄褐色	砂粒、砂礫を含む	透し有
7	壺	ナデ、口縁にハケ	ハケ、ナデ研磨	灰褐色	暗黄橙色	石粒、砂礫を多く含む	線刻有
8	壺	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	橙褐色	橙褐色	細砂粒～砂礫を含む	
9	壺	ハケ、ナデ	ナデ	橙褐色	橙褐色	砂粒を含む	煤付着
10	壺	ナデ、口縁研磨	研磨	黄橙色	黄橙色	砂粒、砂礫を含む	肩に14条の沈線
11	壺	ナデ	ナデ、胴部研磨	黄橙色	黄橙色	砂粒を多く含む	
12	壺	ナデ	ナデ	暗橙色	暗橙色	砂粒、石礫を含む	
13	壺	荒いハケ、ナデ	ハケのちナデ	橙褐色	橙褐色	砂粒、礫を含む	
14	壺	ナデ	ナデ(一部ハケ)	橙褐色	橙褐色	砂粒、砂礫を若干含む	
15	壺	ナデ～ハケ	ハケ、口縁部ナデ	明黄褐色	明黄褐色	砂粒を含む	
16	壺	ナデ～ハケ～ナデ	ハケ、口縁部ナデ	暗橙色	暗橙色	砂粒、砂礫を含む	
17	壺	ナデ	ハケ、一部ナデ	橙褐色	橙褐色	砂粒、砂礫を含む	
18	壺	ナデ	荒いハケ、ナデ	暗橙色	暗橙色	砂粒を含む	
19	壺	研磨	研磨	橙褐色	黄橙色	砂粒を含む	突帯有
20	鉢	研磨	研磨	黄橙色	橙褐色	砂粒を含む	口縁部2ヶ所切り落としている
21	高坏	研磨	研磨	黄橙色	黄橙色	砂粒を若干含む	
22	高坏	ハケ、研磨	ハケ、研磨	橙褐色	橙褐色	砂粒、砂礫を含む	
23	高坏	ナデ	研磨	橙褐色	黄褐色	砂粒を含む	

土器觀察表 2

遺物 番号	器種	調 整		色 調		胎 土	備 考
		内 面	外 面	内 面	外 面		
24	高壺	ナデ	研磨	黄橙色	橙褐色	砂粒を多く含む	
25	小型壺	ナデ	ナデ	褐灰色	黄褐色	砂粒を含む	
26	小型壺	ナデ	ナデ	黄橙色	黄橙色	砂粒を含む	
27	手捏壺	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	砂粒を若干含む	
28	手捏壺	ナデ	ナデ	黄橙色	黄褐色	砂粒を若干含む	
29	器台	研磨	研磨	橙褐色	橙褐色	砂粒を多く含む	2段に透しを施す
30	壺	ナデ	ナデ	褐灰色	黄橙色	砂礫を多く含む	貼付突帯
31	壺	ハケ、ナデ	ナデ	褐灰色	黄橙色	砂礫を多く含む	貼付突帯
32	壺	ハケ、ナデ	ナデ	黄褐色	黄橙色	砂礫を多く含む	貼付突帯
33	壺	ハケ、ナデ	ナデ	褐灰色	黄白色	砂礫を含む	
34	壺	ハケ	ハケ、一部ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色	砂粒を含む	
35	壺	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	灰褐色	黑褐色	砂礫を若干含む	
36	壺	ハケ	ハケ	黄橙色	黄褐色	砂粒を多く含む	
37	壺	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	灰黄褐色	暗黄橙色	砂粒、砂礫を含む	
38	壺	ナデ	ハケ、ナデ	暗灰色	暗褐色	砂礫を若干含む	
39	壺	ナデ	ハケ後ナデ	橙褐色	橙褐色	砂粒、砂礫を含む	
40	壺	ナデ	ハケ	灰黄褐色	暗黄橙色	砂礫を若干含む	
41	壺	ナデ	ナデ	黄橙色	黄橙色	砂粒を含む	片口状の口縁
42	壺	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	黄褐色	黄褐色	砂粒を含む	
43	壺	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	黄橙色	黄橙色	砂粒を多く含む	
44	壺	ナデ	ナデ	黄褐色	橙褐色	砂粒、砂礫を含む	
45	壺	ナデ	研磨	橙色	橙色	砂粒を多く含む	
46	壺	ハケ	ナデ、削り状ハケ	淡黄色	淡黄色	砂礫を含む	

土器觀察表3

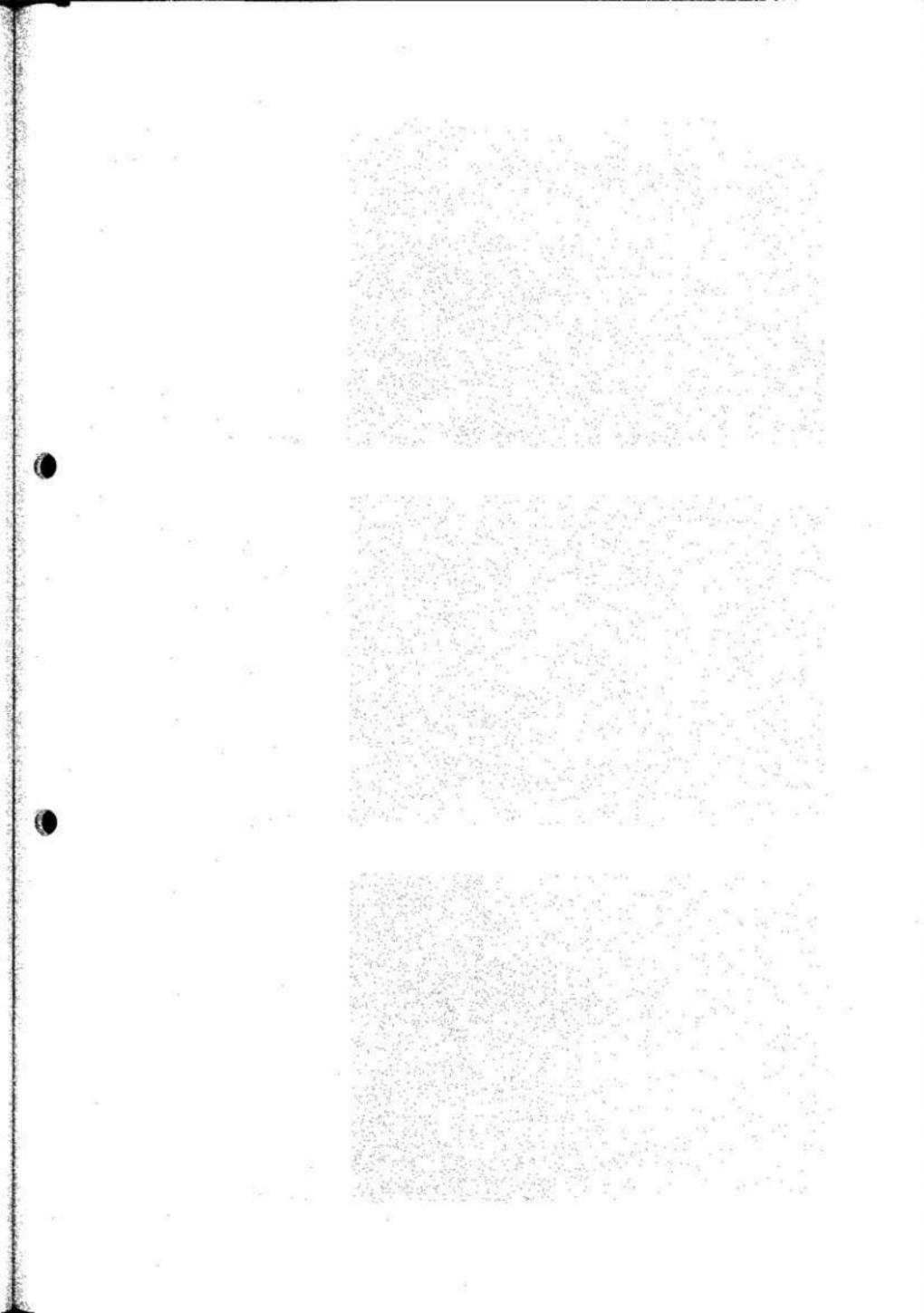
遺物 番号	器種	調 整		色 調		胎 土	備 考
		内 面	外 面	内 面	外 面		
47	壺	ハケ 一部ナデ	ハケ、 一部ナデ	褐灰色	黄橙色	砂礫を含む	
48	高坏	ナデ、研磨	研磨	黄橙色	黄橙色	砂粒を含む	縦方向に暗文状の ものがある
49	高坏	ハケ、ナデ	研磨	黄橙色	暗橙色	砂粒、砂礫を若干含む	
50	高坏	ナデ	ナデ	橙褐色	橙褐色	砂粒、砂礫を含む	
51	高坏	ナデ、研磨	研磨	黄橙色	黄橙色	砂粒を含む	透し有
52	器台	ハケ、ナデ	研磨、 一部ヨコナデ	黄褐色	黄橙色	砂粒をやや含む	
53	器台	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	橙褐色	橙褐色	砂粒、砂礫を含む	
54	壺	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	黄橙色	黄褐色	砂礫を含む	
55	壺	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	黄橙色	赤褐色	砂礫を若干含む	
56	壺	—	ナデ	黄褐色	灰黄褐色	砂礫を多く含む	
57	壺	ナデ	ナデ、ハケ 研磨	黄橙色	黄橙色	砂粒を多く含む	
58	壺	ナデ	ハケ、ナデ	黄橙色	橙褐色	砂粒、砂礫を含む	
59	小型壺	ナデ	ヘラナデ、 ナデ	暗橙色	暗橙色	砂粒を若干含む	
65	壺	ナデ	ナデ	黄橙色	暗褐色	金雲母を含む 細砂粒を多く含む	波状文
66	壺	ナデ	ハケ、ナデ	灰褐色	橙褐色	砂粒を含む	波状文
67	高坏	ナデ	ナデ	暗橙色	暗橙色	砂粒を含む	
68	高坏	ナデ?	研磨	黄橙色	黄橙色	砂粒を含む	
69	壺	ナデ	ナデ	黄橙色	黄橙色	砂粒を含む	貼付突帯
70	壺	ナデ	ナデ	黄灰色	黄橙色	砂粒を含む	線刻有
71	小型壺	ナデ	ナデ	黄褐色	灰褐色	砂粒を含む	
72	小型高坏	ナデ	ナデ	黄橙色	黄橙色	砂礫を若干含む	器台?
73	壺	ナデ	ナデ	黑色	暗橙色	砂粒、砂礫を含む	
74	瓶	ナデ	ナデ	橙褐色	橙褐色	砂礫を多く含む	穿孔有

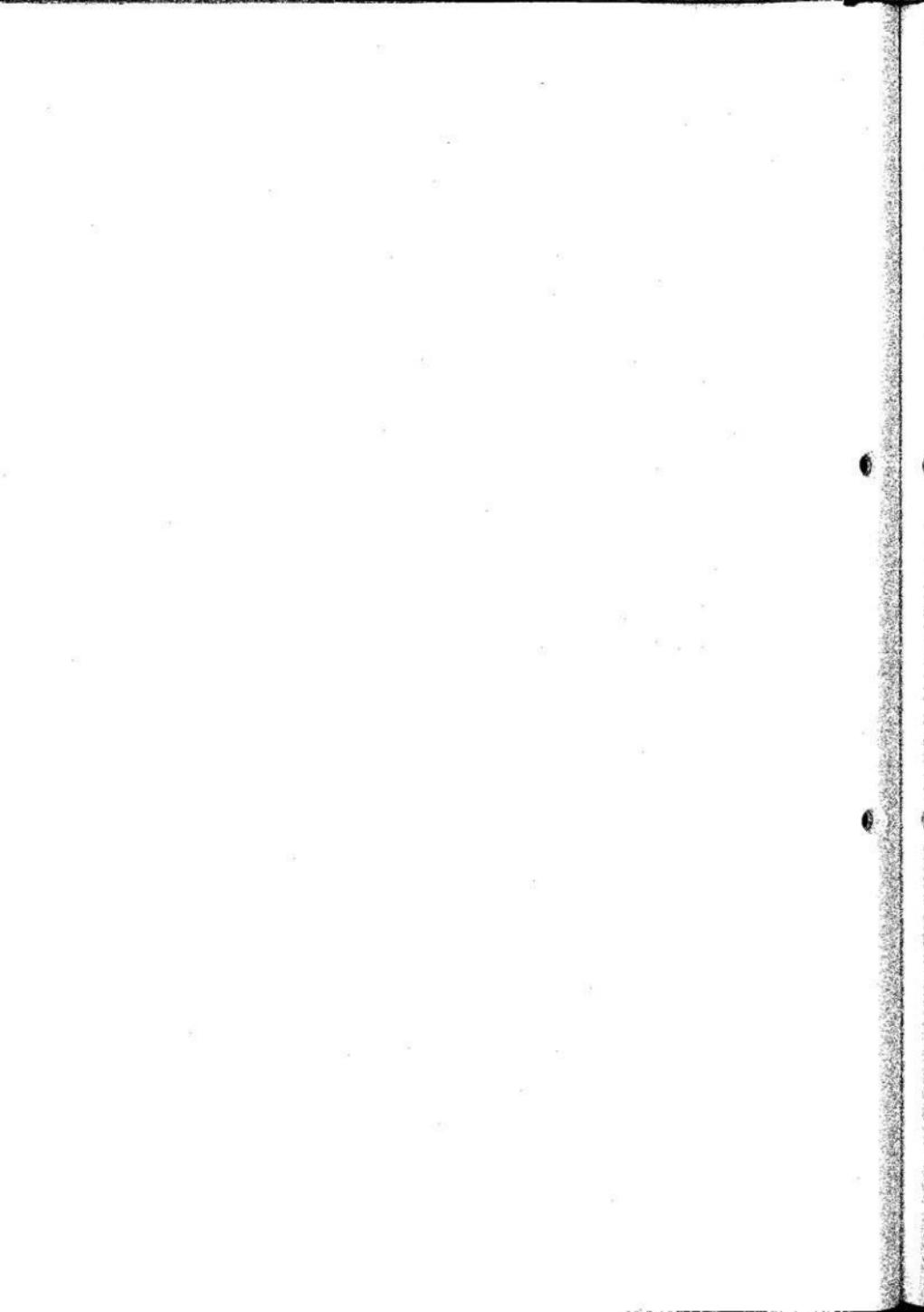
土器観察表4

遺物 番号	器種	調 整		色 調		胎 土	備 考
		内 面	外 面	内 面	外 面		
75	鉢	格子目布痕	ナデ	橙色	橙色	砂礫を含む	布痕土器
76	壺	ナデ	ナデ	黄橙色	黄橙色	細砂粒を含む	ヘラ切底
77	壺	ナデ	ナデ	暗橙色	暗橙色	砂粒を若干含む	糸切底
78	蓋	ナデ	ナデ	黄灰色	黄灰色	砂粒を若干含む	須恵器
79	高台付壺	ナデ	ナデ	灰色	灰色	細砂粒を含む	須恵器
80	高台付壺	ナデ	ナデ	黄灰色	褐灰色	砂礫を若干含む	須恵器
81	高台付壺	ナデ	ナデ	灰白色	暗灰色	細砂粒を含む	須恵器
82	碗	ナデ	ナデ	灰色	灰色	細砂粒を若干含む	須恵器 ヘラ切底
83	壺	ナデ	ナデ	黑色	灰色	微細粒を若干含む	須恵器 自然釉
84	壺	ナデ	ナデ	暗赤褐色	黑色 暗赤褐色	微細粒を若干含む	須恵器 底部、穿孔
85	甕	青海波	平行叩き	灰色	青灰色	砂粒を若干含む	須恵器

石器観察表

遺物 番号	器種	最 大 長 (cm)	最 大 幅 (cm)	最 大 厚 (cm)	重 量 (g)	石 材	備 考
60	台石	26.6	24.0	20.0	2,380	砂岩	全面剥離が著しい
61	凹石	12.8	12.0	5.1	1,190	砂岩	
62	凹石	15.5	8.8	6	1,250	砂岩	敲石としても使用
63	磨石	9.7	8.2	1.1	123	砂岩	砥石か
64	紡錘車	-	4.2	1.82	45.49	粘板岩	



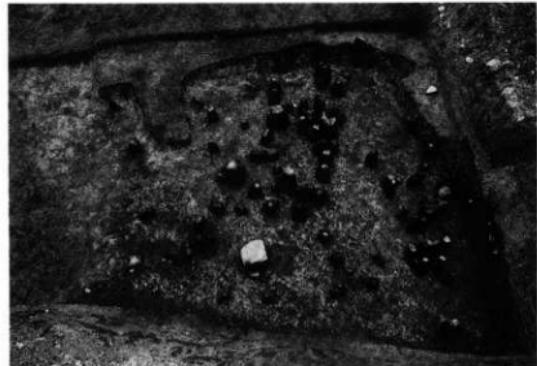


図版 1
(調査状況 1)

調査区全景
(表土剥離後)



1号竪穴住居

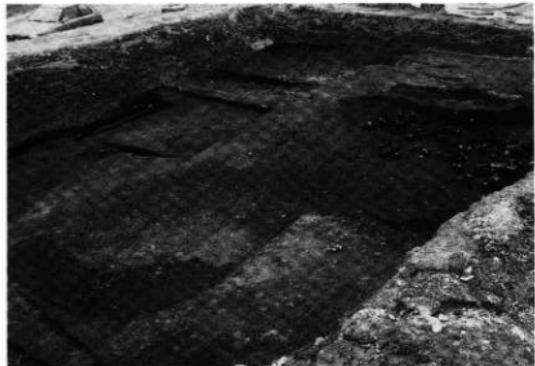


集石造構



図版2
(調査状況 2)

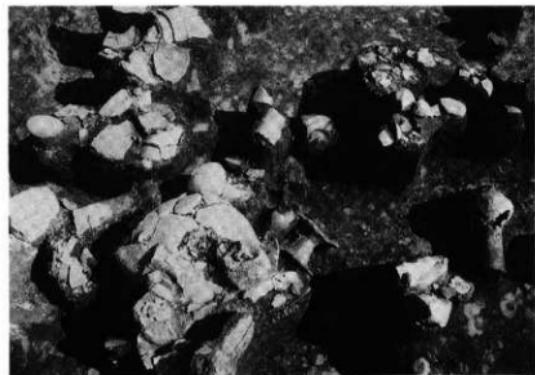
周溝状造構
2号・3号竪穴住居
(切り合い)



2号竪穴住居
土器出土状況

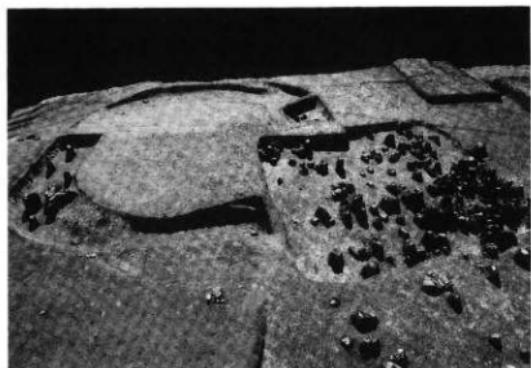


2号竪穴住居
土器出土状況



図版 3
(調査状況 3)

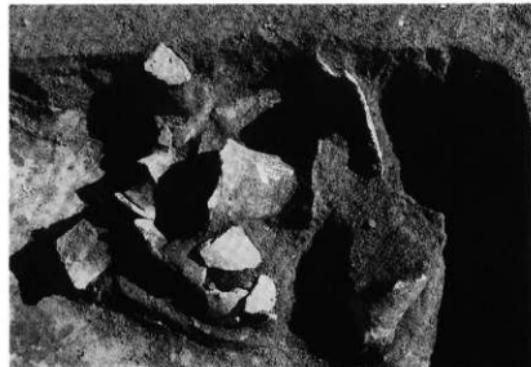
周溝状造構
2号・3号竪穴住居
(完掘)



2号・3号竪穴住居



2号・3号竪穴住居
土器出土状況



図版 4
(調査状況 4)

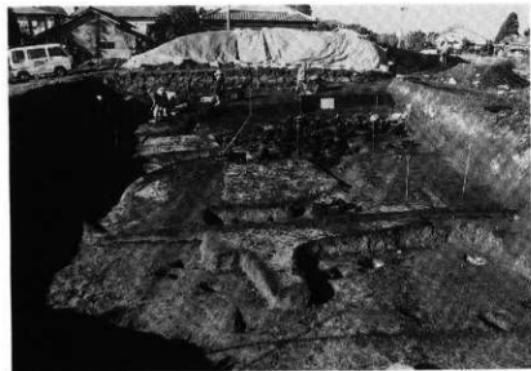
灰黒色土層
土器出土状況



調査区全景
(完掘後)



調査風景



図版 5 出土遺物 1



図版 6 出土遺物 2



図版 7 出土遺物 3



図版 8 出土遺物 4



報告書抄録

ふりがな	くまのだいにいせき							
書名	熊野第2遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第36集							
編著者名	中山 豪							
編集機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橋通東一丁目14番20号 TEL 0985-25-2111							
発行年月日	西暦1999年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くまのだいに 熊野第2	みやざきけんみやざきし おおあら 宮崎県宮崎市大字 くまの 熊野	45201		31度 49分 46秒	131度 25分 25秒	19980107~ 19980131	600	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
熊野第2	集落跡	弥生	住居3基 周溝状遺構	弥生式土器 紡錘車 台石		間仕切住居		

熊野第2遺跡

1999年3月

発行 宮崎市教育委員会